

「武蔵野 33 観音霊場巡り ①練馬区内コース」

4月8日 記 小川雅愛

- 活動実施日 令和5年(2023)4月6日 10:00～13:00
- 実施地 練馬区内一番寺～三番寺 ■参加人数 21名 ■歩行距離 約5キロ
- コース 所沢駅集合～練馬高野台駅→長命寺→徒歩(石神井公園)→道場寺→三寶寺
→(石神井城跡見学)→石神井公園内解散

1) 会として二度目

当会としては10年ひと昔前の平成24年(2012)から平成25年(2013)にかけて11回結願で巡礼しているので今回は二度目となる。その当時の活動報告を見ると懐かしい顔ぶれが見える。前回実施時からかなり会員の入れ替わりがあり、未体験者は少なくとも60～70%と推定される。観音霊場には所沢市内の7つの寺院が入っていることなどで人気があり、再企画にも拘わらず20名を超える参加人数のにぎやかな巡礼団となった。

2) 観音霊場(札所)巡りの歴史

12世紀の西国33か所観音霊場巡り、13世紀坂東33か所観音霊場巡り、15世紀秩父34か所観音霊場巡りが加わる。とくに江戸時代には観音信仰は盛んで、全国で観音霊場巡りの結成数は100か所以上もあった。一時的な曲折はあるものの現在もそのブームは少なからず続いている。数年前に巡礼した狭山湖を一周する狭山33観音霊場巡りなども江戸時代から続くその一つである。

3) 武蔵野33観音霊場の結成

比較的新しく、昭和15(1940)年郷土史家の柴田常恵先生の発願で、寺々のご住職に呼びかけて34の寺々を選び、結成されたものである。西武鉄道の沿線に近い寺々が多く、巡礼にとりくみやすいのが特色である。なお、愛知県ご出身の柴田常恵先生は昭和4年(1929)埼玉郷土会を設立され、埼玉にゆかりのある方である。

<一番寺 東高野山 長命寺の参観・巡礼> 真言宗豊山派

練馬高野台駅から徒歩5分。寺までの駅周辺の変貌には10年前にも参加の方も驚かされていた。通常の南大門からでなくまずは奥の院に参詣すべく、東入口から広い境内に向かう。

◆江戸時代から東の高野山として信仰されていた寺院で、山号の由来になる慶安5年(1652)に建立された五輪塔、宝篋印塔、石灯籠の立ち並ぶ中を奥の院(宝形造の奥の院燈籠堂)へ向かう。周囲には高野山奥の院を模して設けられた多くの石塔・石仏(都の史跡指定)が置かれている。奥の院の左手にある姿見の井戸は現在実際には見ることはできないが覗いて

姿が映ると長生きできると言い伝えられている靈感スポットである。

◆本尊 十一面観音の安置されている八角円堂、金堂前のスペースでは他の参詣者に迷惑がかからないように気をつけて、各自の想いを込めた般若心経を読経した。

◆入母屋造の風格のある本堂前から寛文年間に建立された仁王門を見る。当院最古の建築物で墓股にひられた鳥の彫刻が見事である。墓股は古くは実用本位であったが時代が進むとともに装飾が華美になり彫刻を見れば時代が凡そ推定できるといわれている。また、そばの練馬区最古の鐘楼の梵鐘を見て、最後は東西南北 4 方角の守護神像があるのは珍しい南大門をくぐって次に向かう。

観音堂の観音様、奥の院のお大師と巡礼のスタートにふさわしい寺院であった。次の二番寺へは歩くとかなりあるが公園の葉桜と新緑の木々を楽しみつつ、距離を感じないで到着した。



長命寺 南大門前

<二番寺 豊嶋山 道場寺の参観・巡礼> 曹洞宗

◆奈良時代の天平元年（729）行基菩薩が阿弥陀如来像を安置したことに始まり、鎌倉時代は建長寺の僧侶の開山で臨済宗、応安 5 年（1372）には石神井城主の豊嶋氏の菩提寺になり名称が現在の豊嶋山道場寺となる。文明 9 年（1477）、石神井城の落城とともに焼失、後に、後北条氏により寺運を盛り返すも後北条氏の滅亡による衰微、慶長年間に曹洞宗寺院として再興した。

◆都内ではあまり見かけない三重塔、唐招提寺金堂を模した本堂がいかにも行基菩薩開創の寺にふさわしい趣、木々の生い茂る閑静ななか巡礼を続ける。



道場寺 & 三重の塔

＜三番寺 亀頂山 三寶寺の参観・巡礼＞ 真言宗智山派

道場寺の隣り合わせともいえる位置に並ぶ大寺。もとは石神井池東端の南、禅定院付近にあったようである。豊嶋氏の祈願寺であったが石神井城の落城後、太田道灌により豊嶋氏の菩提を弔うため石神井城跡地に当山を移されたという。

◆右手の通用門は旧幕臣勝海舟の屋敷門を移築したものとされる。

◆御成門は三代將軍徳川家光が鷹狩の際に休息所としたことに因むもので、平常は庶民の通行は禁じられていたことによる。

◆本堂前から奥にはいった所の広い空間にある17mの大塔、身の丈9mの平和観音像を巡る。今回の三つの寺は敷地、建築物、その歴史などすべてにおいてスケールが大きく、深い感銘をうける霊場巡りであった。

その後石神井城跡を見学し、予定を変えて公園内で解散とした。



三寶寺



平和観音像

●石神井城跡の立ち寄り一道場寺・三寶寺の被災の歴史、石神井城の落城（参考）

三寶寺の横から北へ狭い道を進み三寶寺池にすぐ出る。池から南西の小高い丘に石神井城跡がある。ここを拠点とした豊島氏（豊嶋氏）や城の歴史を知りたく立ち寄る。

- ① 豊島氏は桓武平氏の末裔、坂東八平氏の一つである秩父平氏は有力者の河越氏や畠山氏を輩出している。それと同じ秩父平氏から分出した武士団の豊島氏、東京地域では豊島氏、葛西氏、江戸氏である。前九年の役、後三年の役に参陣した平武常の子から豊島氏を名乗る。頼朝の挙兵にも参陣しており、平安時代からすでに有力な武士団であった。
- ② 豊島氏の初期の本城は平塚城といわれる。平塚城は律令時代に豊島郡（東京ではほかに荏原郡と足立郡）で豊島郡衙のあったとされる北区上中里の平塚神社あたりにあった。その後、鎌倉幕府創立以降に歴史の表舞台に登場することも少ないが、石神井川流域の開発城主として、石神井城、練馬城などを築き勢力を拡大してきた。鎌倉公方、関東管領の組織が武蔵に及ぶと関東管領では山内上杉を支える武士団として従っている。古河公方対関東管領山内上杉・扇谷上杉連合軍の戦いでは豊島氏は関東管領側の味方として後に戦うことになる太田道灌とともに長く参陣している。
- ③ この流れを大きく変えたのが山内上杉の家宰長尾家の相続をめぐる不満が端緒となった長尾景春の主家山内上杉への反乱である。この反乱は各地に波及し、中小の武士団や地侍などを巻き込んだ大きなものとなった。豊島氏がこの反乱に加担したことで、太田道灌と対立することとなった。古河公方との戦いの防御のために築城の江戸城（太田道灌）と河越城（扇谷上杉氏当主が在城）、2つの城を遮る形で豊島氏の諸城があり、戦略上の攻略を迫られた。武蔵野台地・豊島台地を舞台に騎馬団で騎射に強い豊島氏一族 VS 古河公方対抗陣地五十子陣（本庄市）や公方方の拠点成田城・古河城等の湿地での攻防の経験が豊富な足軽部隊を加えた太田道灌の戦いであった。
- ④ 太田道灌の巧みな戦術、地形を十分に生かした作戦で、豊島氏の豪傑豊島泰経、泰明兄弟の軍勢を撃破する。最終的には石神井城にこもる豊島泰経と降伏条件としての堀の埋め立てで和議を結ぶが10日後も和議が履行されないことを盾に、屈服した各地の長尾の軍を加えて軍を強化した太田道灌勢で要害の石神井城を総攻撃し落城させた。その際城主は一人逃亡し、残された家人や妻女はすべて城と運命を共にした。照姫の悲劇の伝説が生まれた。城主は逃亡の末自刃したといわれるが定かではない。いずれにしても平安時代から長くこの地域を支配してきた有力な武士団の豊島氏はこの戦いの帰趨により滅亡した。
- ⑤ 石神井城の立地
北は三寶寺池の断崖、南は石神井川の天然の堀に囲われた舌状台地に立つ連廓式平山城である。これに東西に土塁と空堀をめぐらせた。堀と土塁による高低差は一説によると10m以上という難攻不落の堅城であった。逆に堅城であるがゆえに、城を出て戦った江古田原の戦い、沼袋の戦いの敗戦の際の敗残の兵を石神井城に収容しきれなかったことによる兵の減少が落城の一因ともなった。丘を登った台地が城跡史跡となっている。廓

のあった広場や土塁と空堀の一部がそれらしいものとして確認できた。

なお、室町時代の関東地方一円の歴史は複雑すぎて良くわからないのが常であったが「石神井城の落城」をキーワードにして紐解きの活動をしたく下記の本を読み、当時の歴史の流れや因果関係、謎が少しはわかりかけたように感じる。室町時代にも荘園はほぼ残存。荘園と侍の関係性、尊氏の母方が上杉氏で関東管領は京都出身の公家の出ともいえること、足利基氏に始まる鎌倉公方（一時入間川御所）・古河公方・堀越公方の関係等々わかってきた。

室町幕府の役人がルーツで関東管領の役人として関東へ下った太田家。道真、道灌父子が武人とあるとともに歌人でもあったことも納得できる。（山吹の里の逸話）

かなり前になるが会のバス旅で都幾川町の慈光寺を訪ねた際、ご住職が源頼朝は当寺に頻繁に来られるのでその街道が本来の鎌倉街道の始まり、寺の荘園は千町歩の広大なものと説明されたことなども同時に思い出した。

以上

参考文献

- ① 武蔵野三十三所観音霊場 武蔵野観音霊場会編・白木利幸著 朱鷺書房
- ② 日本の神様・仏様 まるごと事典 島崎 晋著 廣済堂文庫
- ③ 東京都の歴史 山川出版社
- ④ 戦乱と政変の室町時代 渡辺 大門著 柏書房
- ⑤ 騎虎の将 太田道灌 上巻・下巻 幡 大介著 徳間書店
- ⑥ その他 ネット参考

「今回の担当」 Eグループ 國谷 小川 曾部 「写真協力」 Dグループ 小倉

